

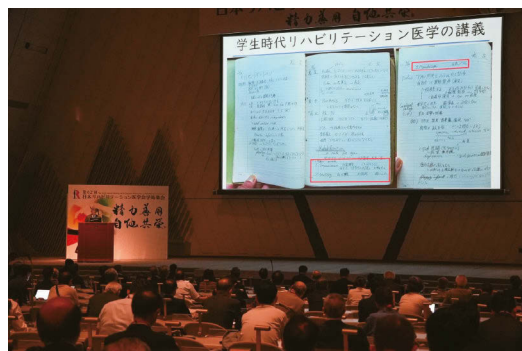
## 第 62 回日本リハビリテーション医学会学術集会レポート

第 62 回日本リハビリテーション医学会学術集会は、2025 年 6 月 12 日（木）から 14 日（土）までの 3 日間、国立京都国際会館で開催されました。7 月 1 日（火）から 31 日（木）までオンデマンド配信も行われました。新しい企画が多く活気にあふれた学術集会の様子を広報委員会が報告します。

### 柔道の理念をリハビリテーション医学・医療に生かす（会長講演）

第 62 回日本リハビリテーション医学会学術集会の会長講演では、京都府立医科大学リハビリテーション医学教室の三上靖夫先生が「リハビリテーション医学・医療から学んだことー医療従事者が持つべき精力善用・自他共栄の心ー」と題し、自身の長い臨床経験を通して培われた想いを熱く語られました。学生時代から整形外科医を目指して歩みを進める中で、患者さんの生活に深く寄り添う必要性に気づき、脊椎外科医として自ら術後の訓練を続けるうちに、次第にリハビリテーション医学へ関心が移った経緯を誠実に語られました。

特に印象深かったのは、嘉納治五郎氏が説いた柔道の理念「精力善用・自他共栄」を、医療従事者としての姿勢に重ねあわせた部分です。「何事もやり遂げるには、自ら努力し力を尽くすことが必要であり、身につけた力は人のために活かしてこそ意味がある。そのためにも自己を高め続けることが求められる。医療従事者は、患者の力を引き出し生活を支える存在であるべきで、その使命を果たすためにも常に成長し続ける必要がある。」と強調されました。患者さんのために尽力するだけでなく、患者さんからも多くを学び、共により良い医療を築いていくという三上先生の講演はまさにリハビリテーション医療の核心を突くものであり、聴講者に深い感銘を与える素晴らしい内容でした。



三上靖夫先生の会長講演の様子

### すぐに日常診療をサポートできるアイデアが集合！

今回の目玉企画の一つである特別企画「アイデア善用ー手作りのリハビリテーション医療ー“あなたのアイデア教えてくださいコンテスト”」には、明日の日常診療ですぐに使えるアイデア・工夫がつまった 36 件の応募作品が集まりました。受賞作品の傾向としては、患者さんが自発的に身体機能を使いたくなる工夫や、安価かつ手軽に実現できる技術が高く評価されて、広報委員会にも「コンテスト企画が斬新で、他施設での臨床の工夫などを見ることができ、とても参考になった。」という感想が届きました。

### 職種や所属を超えた幅広いネットワーク作りの場に（全員懇親会）

6 月 13 日（金）の夕方に全員懇親会が開催され、参加者同士の交流を深める貴重な機会となりました。会場は第 1 会場（1 階メインホール）で、



特別企画「アイデア善用—手作りのリハビリテーション医療—  
“あなたのアイデア教えてくださいコンテスト”」の応募作品  
展示コーナー



ポスター発表の様子



介助犬を紹介するブースの様子



大人気で長蛇の列ができた壹銭洋食の屋台ブース

同志社大學應援團による華やかなチアリーディングがオープニングを飾り、迫力ある演技と明るい笑顔で会場の空気が一気に和みました。続いて介助犬のPRタイムが設けられ、実際に活動している介助犬が登場し、患者さんの生活を支える役割が紹介されました。メインホール前のロビーには軽食とドリンクが準備され、階段上エリアでは音楽部による生演奏も披露されるなど、穏やかな雰囲気の中で、職種や所属を超えた幅広いネットワーク作りの場として非常に有意義だったとの声が多く寄せられました。

## 斬新な症例検討会と「言葉」に焦点を当てた特別企画

新たな試みとして、臨床的に価値のある試行錯

誤を共有し、若手リハビリテーション科医の学びにつなげる「Try and Error 症例検討会」が、切断・義肢、脳血管障害、コミュニケーション障害などテーマ別に計3回開催され、全国の医療機関からいろいろな経験が発表されました。臨床現場のリアルな挑戦を通じ、実践的な教訓が共有される革新的な教育企画となりました。

特別企画として「言葉ってなんだろう？」が3日間にわたり開催されました。これは音声言語、手話、触手話、指文字など多様な「言葉」に焦点を当て、コミュニケーションの本質を探る新しい試みでした。初日は構音器障害をテーマに教育講演や座談会が行われ、2日目は受容器障害に関する人工内耳の講演や当事者を交えた座談会がありました。最終日は失語症や意思疎通支援を軸に講

演が行われ、最終総括として総合ディスカッションでは「言葉ってなんだろう？」が多角的に議論されました。参加者は言葉とコミュニケーションの深い関わりを改めて学び、障害を抱える当事者の声から大きな気づきが得られた連続企画となりました。広報委員会に届いた声には、「言葉ってなんだろう？の企画がとても良かった。人工内耳や失語症、構音障害など、言葉にハードルをもつ当事者の方がたくさん講演されていて、言葉について深く考えさせられた。」という意見がありました。また、全般にわたって「手話失語の講演はとても面白かった。また、手話通訳や文字通訳の情報保障が充実していて、情報保障を使わない人、聞こえる人からみても聞き逃したところ、わかりにくかったところを文字通訳で確認できて良かった。情報保障はすべての参加者にとっても便利で、今後もあった方がよいと思った。」「聴覚障害者の方を中心に視覚障害者の方々の障害者目線からのディスカッションが大変興味深かった。」「コミュニケーションに関する企画が連日あって、様々な障害のある人たちの会話のボードは圧巻だった。」など、バリアフリーなサービスや企画に高い評価が集まりました。

## バリアフリー上映会、入来篤史先生、井上章一先生の何度でも聴きたい特別講演と文化講演

さらに6月13日には、映画「インディペンデントリビング」のバリアフリー上映会が行われました。大阪の自立生活センターを舞台に、重度障害があっても地域で自立して暮らす姿を描いた本作を通じ、改めて自立や支援のあり方を考える機会となりました。さらに今回は、視覚や聴覚に障害のある方も一緒に楽しめるよう、音声ガイドや字幕をスマートフォンで体験でき、音声ガイドも流れるUDCast®を導入したことで、誰もが同じ場

で映画を共有できる新しい上映会となりました。

帝京大学先端総合研究機構の入来篤史先生による特別講演「人類の進化と文明史が示す二つの脳可塑性メカニズム」は、大変示唆に富んだ素晴らしい内容でした。入来先生は、人類の長い進化の中で獲得してきた脳の可塑性を、進化的背景と文明の発展を絡めて二つのメカニズムに整理し、非常にわかりやすく解説されました。また、基礎神経科学に留まらずリハビリテーション医学への応用可能性についても触れ、病後の脳再編成や学習促進にこの進化的視点がどのように役立つのかを示唆されました。

国際日本文化研究センターの井上章一先生による文化講演「老舗と大学—京都人の教育観—」は、京都に数多く存在する由緒ある老舗の価値観に光をあて、そこから見える教育観や社会観を鮮やかに浮かび上がらせた素晴らしい内容でした。平安時代から続くような家が珍しくない京都において、老舗は近代的なメリトクラシー（能力主義）とは異なる価値体系を大切にしています。井上先生は、こうした老舗に根ざした独自の考え方を紹介しながら、近代社会の仕組みそのものを相対化する京都の姿勢を解説し、学歴や競争一辺倒ではない、継承や人格形成を重んじる教育観について多くの気づきを与えてくれました。

## アプリなどの工夫

参加者からは、「デジタルアプリが使いやすかった。スタンプラリーなどのアプリも集めるのが楽しかった。」「患者さんと学会がつながっているようで、良かったように思います。」「コンセプトがしっかりしていたからか、いつもと違うところにも入ってみたいくなり、たくさん聴講しました。」「若手の先生方の企画も素晴らしかった。」など、高評価の感想が多数届きました。最後に広報委員会の先生方の感想を紹介します。



企画・運営に尽力した京都府立医科大学リハビリテーション医学教室の皆さん

## 広報委員会からの感想

【佐浦隆一 担当副理事長／大阪医科薬科大学】

今回の学術集会は、リハビリテーション医学・医療に関係する講演や発表がとても充実していました。また、医学以外の内容も多く、個人的には普段以上に集中して聴講する機会となりました。

文化や歴史に関わる講演を聞くことができる機会は少なく、三上靖夫会長ほか、京都府立医科大学リハビリテーション医学教室の先生方が「自らが聴きたい講演を集めた」プログラムは、とても奥が深く、そして面白く、特に文化講演「老舗と大学—京都人の教育観—（国際日本文化研究センター 井上章一先生）」は何度もオンデマンド配信で視聴しました。

7月には『禁断の京都カースト』という新書（KLK 新書）がSNSなどで話題となりました。結局、タイトルが『京都カーストは本当に存在するのか』に変更され、発行元は「書店での混乱を避けるため、オンラインでのみ販売」と発表しましたが、まるで発禁の書のようにです。京都と大阪

の狭間にある病院に勤務する神戸出身者として、思わず興味を惹かれました。読み込んで、京都の文化とその奥深さに触れてみたいと思います。

【酒井朋子 広報委員長／東京科学大学】

Xで配信された各大学の事前応援動画が、軽快なジャズのリズムに乗せて巧みに再構成され、一つの映像として各会場で紹介されていました。各大学の個性が活かされつつも、全体として医学会の一体感や学術集会に対する応援の熱意が伝わってきて、とても楽しく、また新鮮な印象を受けました。

【石田由佳子 広報委員／奈良県立医科大学】

会場では事前応援動画が定期的に映されており、自分たちの大学の動画が出てくるのが楽しかったです。今回、初めてスタンプラリーに参加しましたが、スタンプ集めに巡ったエリアごとに新しい発見があり、今後の診療に活用していきたいと感じました。

（文責：広報委員会）